

「よみがえる伊藤整」への誘い

市立小樽文学館館長 亀井 秀雄



市立小樽文学館では、小樽が生んだ昭和の代表的な文学者・伊藤整の生誕100年を記念し、小樽商科大学の全面的な後援を得て講演会とシンポジウムを開催する運びとなりました。

伊藤整は小樽高等商業学校に在学した頃から詩を書き始め、卒業して小樽市立中学校の英語教師をしている間に、『雪明りの路』を出版して、高村光太郎たちから新進の詩人として注目されました。のち、東京商科大学本科（現・一橋大学）に入学して上京し、この頃から散文に転じて、「新心理主義文学」を提唱し、『感情細胞の断面』『潜在意識の軌道』など、無意識の領域に照明を当てる実験的な小説を発表して、川端康成から高い評価を得ました。今回の講演会の講師、オハイオ州立大学のウィリアム・タイラー助教授が最近翻訳を完成した『幽鬼の街』は、小樽を舞台に、印象拡大法という方法で記憶の深層を探った幻想的な小説で、塩谷を舞台にした『幽鬼の村』と合わせて、伊藤整の文壇的な評価が定まった作品とされています。伊藤整にはその他、小樽を舞台とした作品に『青春』『鳴海仙吉』『若い詩人の肖像』などがあり、それらにちなんで、今回は講演会のテーマを「伊藤整文学の原／幻境」としました。

伊藤整は戦後、小説『鳴海仙吉』と評論集『小説の方法』の両面から日本の近代小説の変革を企てましたが、昭和25年、イギリスの小説家、D・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』を翻訳し、小山書店から出版したところ、東京地検により「刑法第一七五条に定める猥褻文書販売罪」のかどで起訴されてしまいました。いわゆるチャタレイ裁判の始まりです。

戦後の新憲法下における言論裁判として注目された、この裁判で、伊藤整は法廷においてよく闘っただけでなく、『伊藤整氏の生活と意見』という自己戯画的な笑いの方法によって世論を味方につけ、また『裁判』というドキュメントを書いて、起訴の不当性を明らかにし、記録文学の白眉として絶賛されました。その他、伊藤整は「本質移転論」という独自の虚構理論によって、裁判を通して得た「権力・組織・人間・マスメディア」に関する認識を『火の鳥』や『氾濫』などの小説に結晶し、その多彩な活動によって「伊藤整の時代」とも言うべきエポックを作りました。シンポジウムはそのチャタレイ裁判に焦点を合わせたもので、イギリス・フランス・ア

メリカなどにおけるチャタレイ問題にも視野を拓けている、オベリン大学のアン・シェリフ助教授が参加して下さることになりました。

以上のような講演会とシンポジウムは、そのテーマと講師の顔ぶれにより、ひとり伊藤整研究にとどまらず、現代文学研究の面でも画期的な成果をもたらさうものと確信しています。また、このシンポジウムをより盛りあるものとするために、予備講座も開くことにしています。

よみがえる伊藤整

伊藤整生誕100年記念講演会・シンポジウム

会場：小樽商科大学210番教室
日時：2005年6月18日・19日

〔プログラム〕

記念講演会：伊藤整文学の原／幻境

2005年6月18日（土）午後1時より

曾根博義（日本大学）

伊藤整と小樽

ウィリアム・タイラー（オハイオ州立大学）『幽鬼の街』を翻訳して
（日本語）

伊藤 礼（元日本大学教授）

父・伊藤整

司会 玉川薫（市立小樽文学館）

シンポジウム：伊藤整の戦後とチャタレイ裁判

2005年6月19日（日）午後1時より

横手一彦（長崎総合科学大学）

被占領下の表現領域

結城洋一郎（小樽商科大学）

チャタレイ裁判と憲法

アン・シェリフ（オベリン大学）

世界の「チャタレイ」問題と日本の場合（日本語）

紅野謙介（日本大学）

闘う伊藤整氏

司会 亀井秀雄（市立小樽文学館）

講演とシンポジウムのための予備講座

於、市立小樽文学館

2005年5月28日（土）午後2時より

亀井秀雄 『チャタレイ夫人の恋人』を読む

（HP「亀井秀雄の発言」<http://homepage2.nifty.com/k-sekirei/>に掲載予定）

2005年6月11日（土）午後2時より

亀井秀雄 「チャタレイ裁判」とはどんな裁判だったのか

（HP「亀井秀雄の発言」<http://homepage2.nifty.com/k-sekirei/>に掲載予定）

